平成２９年３月１６日（木）　朝日新聞　朝刊　（２３面）

難病の肺炎 血液中に「目印」

阪大助教らが発見
診断簡素化に期待

肺の難病「特発性間質性肺炎」のタイプを見分ける血液中の目印を見つけたと、大阪大の木田博助教らが発表した。現在は手術で調べる必要があるが、血液検査で診断につながる可能性があるという。

特発性間質性肺炎は、肺胞の壁が炎症を起こす病気。10万人に10～20人が発症し、国の難病に指定されている。診断には胸腔鏡を使って肺の組織の一部を取り、この病気のうち、どんなタイプかを調べる。

木田さんらは、患者18人の血液を元に、人の体内で働いているたんぱく質に反応する抗体8千種類を調べた結果、一部の人でウイルスが侵入してきた時に働くたんぱく質に対する抗体の一種が見つかった。この抗体がある場合、ステロイドなどを使った治療が有効な可能性があるという。

この抗体を「目印」として病気の疑いがある人の血液を調べれば、手術を伴う検査をせずに診断できるケースが出てくるかもしれないという。木田さんは「これまでの方法では病気を完全に分類できていなかった可能性がある」と話す。

論文は英科学誌サイエンティフィック・リポーツに掲載された。（合田禄）